

# 大阪商業大学学術情報リポジトリ

## 学歴に関する調査票の設計問題—JGSS-2015の実施を通して—

メタデータ	言語: ja 出版者: 日本版総合的社会調査共同研究拠点 大阪商業大学JGSS研究センター 公開日: 2019-06-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/685">https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/685</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 学歴に関する調査票の設計問題

—JGSS-2015 の実施を通して—

孟 哲男

大阪商業大学 JGSS 研究センター

眞住 優助

大阪商業大学 JGSS 研究センター

岩井 紀子

大阪商業大学総合経営学部

宍戸 邦章

大阪商業大学総合経営学部

岩井 八郎

京都大学大学院教育学研究科

Questionnaire Design Issues for the Education:  
Through the Implementation of JGSS-2015

Tetsuo MO

JGSS Research Center

Osaka University of Commerce

Yusuke MAZUMI

JGSS Research Center

Osaka University of Commerce

Noriko IWAI

Osaka University of Commerce

Kuniaki SHISHIDO

Osaka University of Commerce

Hachiro IWAI

Kyoto University

Educational attainment is a standard demographic variable commonly used in social surveys. These data are often collected for respondents and for their spouses and parents. Obtaining accurate information on educational background is key for ensuring the quality of the collected data. Since the JGSS covers a wide range of ages (20-89), it distinguishes the previous Japanese system of education (before World War II) and its successor (after World War II). Recently, an increasing number of students wish to continue on to vocational colleges. This article demonstrates how survey questionnaire design can be improved in light of the early experience in the JGSS-2015. In the JGSS-2015, some respondents confused vocational colleges with colleges of technology (Kosen). To detect and correct inaccurate educational records, we used information about respondents' age, entrance/graduation year, and school subjects. In this article, we will show the frequency of educational attainment before and after our data cleansing and compare current and modified survey frequencies with those of other national surveys such as the Employment Status Survey and the Comprehensive Survey of Living Conditions. Finally, we report how these problems have been handled in the JGSS-2016.

Key Words: JGSS, Educational attainment, Questionnaire design

学歴は社会調査の分析で、最もよく利用される変数である。本人のみならず、父親・母親・配偶者の学歴を尋ねることが少なくない。学歴の正確な情報を得ることは調査データの質を左右する。JGSS のように、対象者の年齢が 20~89 歳と幅広い場合、旧制と新制の区別が必要である。また近年、学校教育の後に、専門・専修学校で学ぶ者が増えている。本稿では、学歴に関する調査票の設計について、JGSS-2015 で得た知見を紹介する。JGSS-2015 では、旧制から新制への移行期に学校教育を受けた対象者の回答に誤りが多く、高等専門学校と専門・専修学校を混同する回答も目立った。データ・クリーニングに際しては、対象者の年齢、学科・分野、専門・専修学校に通学した時期と専攻の内容を手掛かりとした。本稿では、クリーニング前後の分布を比較し、「国民生活基礎調査」や「就業構造基本調査」の学歴分布と比較している。さらに、JGSS-2016 の調査票の設計における改善点を紹介している。

キーワード： JGSS、学歴、調査票設計

## 1. はじめに—学歴の詳細なクリーニング実施の背景—

社会調査データの分析において、調査対象者の受けた学校教育に関する情報（以下、学歴と呼ぶ）は、最もよく利用される変数である。研究関心とは直接関係しないとしても、学歴はコントロール変数として欠くことができない。大学卒か否か、初等・中等・高等教育レベル、教育年数など、変数としての用いられ方は分析によって異なるが、調査対象者の学歴に関して正確な情報が得られているのかは調査データの質を左右する。また多くの調査には、本人のみならず父親や母親、配偶者の受けた学歴に関する質問項目も盛り込まれている。学歴に関する情報を尋ねる調査項目の設計とデータのコード化には、かなり煩雑な作業が必要とされる。とくに JGSS データのように、20 歳から 89 歳までの幅広い年齢の調査対象者を含む場合、旧制と新制という学校教育制度の区別を考慮しなければならない。また近年では大学進学者だけではなく、学校教育を終えた後、専門学校や専修学校で学ぶ者も増加してきた。JGSS 研究センターでは、調査実施後も絶えず質問文と選択肢のワーディングからレイアウトまで改善を重ねてきた。本稿では、学歴に関する調査票の設計問題について、JGSS-2015 の実施から得た知見を紹介する。

JGSS-2015 では、学歴に関してより詳細な情報を得るため、専門学校への通学経験や通学した時期、専攻した内容などの新規の設問を追加した（問 59-2～62）<sup>(1)</sup>。設問を追加したことで、JGSS の継続設問である、最後に通った学校や専門学校・専修学校への通学経験（問 57～59-1）の回答について、より詳細なクリーニングができるようになった（学歴に関する設問については、附図 1:面接票 pp.16-17 を参照）。

データ入力前のコードの確認とデータ・クリーニングは、調査実施委託機関である中央調査社が、JGSS 研究センター作成の指示書に基づいて行い、その後、JGSS 研究センターでより詳細なクリーニングを行っている。ただし、JGSS-2015 については、上記のように学歴関連の設問が増え、問題箇所を確実に見つけ出すことがより難しくなったため、学歴に関するデータ・クリーニングは、最初の段階からすべて JGSS 研究センターが担当することになった。

作業は、データ入力前のコードの確認段階で見出された怪しい回答（主に専門学校・専修学校での学科・分野、最終学校での学科・学部、および高校での学科の自由記述）60 数ケースについて確認し、誤記入のパターンを探ることから始まった。JGSS では、学歴は面接調査で尋ねており、対象者が回答の際に迷った場合や調査員に語った説明は、調査員により面接調査票に書き留められている。JGSS 研究センターでは、入力されたコードとともに、調査票に書き込まれたこれらの情報を参照して、クリーニングを行った。

その過程で、高等専門学校を専門学校・専修学校と混同するケース、および回答者・配偶者・父親・母親の年齢と旧制・新制学校の通学歴が矛盾するケースが確認された。また、最終学校の学科・学部、国立・公立・私立の区分について、最終学歴が大学である場合も、高校について回答してしまい、調査員または入力前の点検者が、調査後にその回答を修正しているケースも少なからず見られた。そこで、JGSS 研究センターでは、すべての面接回答票の学歴部分を見直した<sup>(2)</sup>。問題箇所については、関連設問から推察できる妥当な範囲内で修正を行った。その数は 219 ケースにのぼった。後述するように、こうした問題のほとんどは調査票の設計を変えることで改善することができる。

JGSS-2015 はサンプル規模が小さく、就業者層のサンプルサイズを上げるために、2016 年 2～4 月に、JGSS-2015 の調査地点 300 のうち 140 地点において、25～49 歳男女 2100 人を対象として、JGSS-2016 を実施することになった。JGSS-2016 では JGSS-2015 の調査票をそのまま使用する予定であったが、学歴関連の設問については、設問の内容と順序を変更し、調査員に配布する調査要領に留意事項を明記した。

本稿では、JGSS-2015 において生じた学歴回答についての問題点を整理し、学歴に関する調査票の設計に注目して、こうした回答の間違いが生じた理由、および JGSS-2016 における改善点について紹介する<sup>(3)</sup>。

## 2. 年齢と旧制・新制学歴の矛盾

### 2.1 年齢による判定基準とデータ修正

JGSS の調査では、対象者本人・配偶者および両親が通った最終学校について、旧制と新制に分けて尋ねている（JGSS-2015 では問 57）。新制学校を旧制学校で回答していないか、または旧制学校を新制学校で回答していないかは、年齢でほぼ推測することができる。学校の種類別に一般的な入学年齢・卒業年齢がわ

かるので、年齢を基にして、何年に最終学校に入学し、卒業したかが推測できる。旧制学校の回答については、在学中に旧制学校から新制学校に変わっても、旧制学校に通ったといえるため、入学年齢で判断する。すなわち、入学した年が、教育基本法と学校教育法が制定された1947年以前であれば問題ないが、1947年より後であれば、旧制学校の回答が間違っていると推測される。この判断基準によれば、たとえば、JGSS-2015の場合（2014年12月31日時点で20～89歳の人を抽出）、73歳以下の人は最終学校が「(ア) 旧制尋常小学校」となることはない。一方、新制学校と回答したケースについては、卒業年齢で判断すればよい。卒業した年が1947年より前であれば間違いで、1947年以降であれば問題ないと判断する。

表1～4は、対象者本人・配偶者・父親・母親のそれぞれの最終学校について、クリーニング前とクリーニング後を比較したクロス表であり、どのカテゴリからどのカテゴリに何ケース修正されたかを示している。これらの表をみると、年齢から判断すると、新制と考えられるが旧制で回答しているケースが、旧制と考えられるが新制で回答しているケースよりも多いことがわかる。具体的には、旧制学校から新制学校に修正したケースが、対象者本人12ケース、配偶者14ケース、父親31ケース、母親32ケース（のべ89ケース）。新制学校から旧制学校に修正したケースは、対象者本人0ケース、配偶者1ケース、父親14ケース、母親13ケースである（のべ28ケース）。

表1 JGSS-2015 クリーニング前とクリーニング後の最終学校【本人】

		クリーニング後													合計		
		戦前							戦後								
		1 旧制尋常小学校	2 旧制高等小学校	3 旧制中学校・高等女学校	4 旧制実業商業学校	5 旧制師範学校	6 旧制高校・旧制専門学校・高等師範学校	7 旧制大学・旧制大学院	8 新制中学校	9 新制高校	10 新制高専	11 新制短大	12 新制大学	13 新制大学院			14 わからない
クリーニング前	1 旧制尋常小学校	13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13
	2 旧制高等小学校	0	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14
	3 旧制中学校・高等女学校	0	0	46	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	51
	4 旧制実業・商業学校	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
	5 旧制師範学校	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	6 旧制高校・旧制専門学校・高等師範学校	0	0	1	0	0	1	0	0	4	0	0	0	0	0	0	6
	7 旧制大学・旧制大学院	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0	0	0	4
	8 新制中学校	0	0	0	0	0	0	0	208	0	0	0	0	0	0	0	208
	9 新制高校	0	0	0	0	0	0	0	1	984	0	0	0	0	0	0	985
	10 新制高専	0	0	0	0	0	0	0	4	31	13	1	0	0	0	0	49
	11 新制短大	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	195	2	0	0	0	198
	12 新制大学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	498	0	0	0	498
	13 新制大学院	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	39	0	0	40
	14 わからない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
99 無回答	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	3	5	
合計		13	14	47	6	1	1	1	220	1020	13	196	504	39	1	3	2079

表2 JGSS-2015 クリーニング前とクリーニング後の最終学校【配偶者】

		クリーニング後															合計				
		戦前							戦後						14 わからない	15 結婚したことはない・離別した		99 無回答			
		1 旧制尋常小学校	2 旧制高等小学校	3 旧制中学校・高等女学校	4 旧制実業・商業学校	5 旧制師範学校	6 旧制高校・旧制専門学校・高等師範学校	7 旧制大学・旧制大学院	8 新制中学校	9 新制高校	10 新制高専	11 新制短大	12 新制大学	13 新制大学院							
クリーニング前	1 旧制尋常小学校	11	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12
	2 旧制高等小学校	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20
	3 旧制中学校・高等女学校	0	0	29	0	0	0	0	8	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	38
	4 旧制実業・商業学校	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
	5 旧制師範学校	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	6 旧制高校・旧制専門学校・高等師範学校	0	0	0	0	0	4	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
	7 旧制大学・旧制大学院	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	8
クリーニング中	8 新制中学校	0	0	0	0	0	0	197	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	197
	9 新制高校	0	0	1	0	0	0	0	726	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	727
	10 新制高専	0	0	0	0	0	0	0	38	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	50
	11 新制短大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	130	0	0	0	0	0	0	0	0	0	130
	12 新制大学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	355	0	0	0	0	0	0	0	0	355
	13 新制大学院	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	28	0	0	0	0	0	0	0	28
	14 わからない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
15 結婚したことはない・離別した	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	468
99 無回答	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15
合計		11	20	30	7	2	4	6	207	766	12	130	357	28	16	468	15	2079			

表3 JGSS-2015 クリーニング前とクリーニング後の最終学校【父親】

		クリーニング後															合計				
		戦前							戦後						14 わからない	99 無回答					
		1 旧制尋常小学校	2 旧制高等小学校	3 旧制中学校・高等女学校	4 旧制実業・商業学校	5 旧制師範学校	6 旧制高校・旧制専門学校・高等師範学校	7 旧制大学・旧制大学院	8 新制中学校	9 新制高校	10 新制高専	11 新制短大	12 新制大学	13 新制大学院							
クリーニング前	1 旧制尋常小学校	291	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	291
	2 旧制高等小学校	0	178	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	179
	3 旧制中学校・高等女学校	0	0	153	0	0	0	0	17	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	172
	4 旧制実業・商業学校	0	0	0	28	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	28
	5 旧制師範学校	0	0	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	9
	6 旧制高校・旧制専門学校・高等師範学校	0	0	0	0	1	64	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	72
	7 旧制大学・旧制大学院	0	0	0	0	0	0	51	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	55
クリーニング中	8 新制中学校	2	2	0	0	0	0	146	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	150
	9 新制高校	0	3	4	1	0	0	0	416	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	424
	10 新制高専	0	0	0	1	0	0	0	25	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	33
	11 新制短大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
	12 新制大学	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	223	0	0	0	0	0	0	0	0	224
	13 新制大学院	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	1	0	11
	14 わからない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
99 無回答	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	47
合計		293	183	157	30	9	65	51	165	451	7	9	227	10	374	48	2079				

表4 JGSS-2015 クリーニング前とクリーニング後の最終学校【母親】

		クリーニング後														合計			
		戦前							戦後										
		1 旧制尋常小学校	2 旧制高等小学校	3 旧制中学校・高等女学校	4 旧制実業・商業学校	5 旧制師範学校	6 旧制高校・旧制専門学校・高等師範学校	7 旧制大学・旧制大学院	8 新制中学校	9 新制高校	10 新制高専	11 新制短大	12 新制大学	13 新制大学院	14 わからない			99 無回答	
クリーニング前	戦	1 旧制尋常小学校	286	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	287
		2 旧制高等小学校	0	182	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	184
		3 旧制中学校・高等女学校	0	1	243	0	0	0	0	14	6	0	0	0	0	0	0	0	264
		4 旧制実業・商業学校	0	0	0	5	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	6
		5 旧制師範学校	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7
		6 旧制高校・旧制専門学校・高等師範学校	0	0	0	0	0	0	36	0	7	0	0	0	0	0	0	0	43
		7 旧制大学・旧制大学院	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	14
クリーニング後	戦	8 新制中学校	2	3	0	0	0	0	0	159	0	0	0	0	0	0	0	0	164
		9 新制高校	0	4	2	1	0	0	0	0	522	0	0	0	0	0	1	0	530
		10 新制高専	0	0	0	1	0	0	0	0	25	1	0	0	0	0	0	0	27
		11 新制短大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	80	0	0	0	0	0	80
		12 新制大学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	70	0	0	0	0	70
		13 新制大学院	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
		14 わからない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	348	0	348
	99 無回答	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	1	0	0	0	49	54	
合計		288	190	245	7	6	36	13	178	563	1	80	72	1	349	50	2079		

### 2.3 調査票の設計問題と JGSS-2016 における改善点

政府が実施している国勢調査などの公的統計調査は、主問で在学の有無を、枝間で学校段階の区分を尋ねているが、旧制か新制かという区分はされていない。例えば、国勢調査は小学・中学、高校・旧制中、短大・高専、大学・大学院の4区分、国民生活基礎調査は、小学・中学、高校・旧制中、専門学校、短大・高専、大学、大学院の6区分で尋ねている。10年間隔で行われる「社会階層と社会移動」全国調査（SSM）の場合は、本人・配偶者・父親・母親の最終学校を旧制・新制に分けて尋ねている。ただし、SSM2005では、本人および配偶者の学歴について、「中学校」「高校」「高等専門学校」「短期大学」「大学」「大学院」「専修学校」「その他（具体的に）」の項目を示して、多項選択の方式で尋ねている。母集団年齢が20-69歳であるため、回答者本人には旧制学校について尋ねる必要がなくなったのである<sup>(4)</sup>。

最終学校はJGSSの継続設問であり、ワーディングや選択肢は第1回目の調査からほとんど変わっていない。附図1のように、JGSSの最終学校の選択肢は一列に並べられ、見やすく、回答しやすいデザインになっている。選択肢の左側には「戦前」、「戦後」とあり、旧制学校と新制学校の違いを強調する工夫もなされている。それでも、前述したように、新制学校を旧制学校で、旧制学校を新制回答で回答するケースが少なからず確認された。

JGSS-2016では、実査の段階で年齢と旧制・新制学歴が矛盾する回答を減らすため、第1に、調査員に配布する調査要領（p.6）に、以下の注意事項を明記した。

- ※〔旧制の学校の回答があった場合の年齢目安〕
- ・74歳以下の人最終学校が「(ア) 旧制尋常小学校」となることはありえない。
  - ・80歳以下の人最終学校が「(イ) 旧制高等小学校」～「(キ) 旧制大学・旧制大学院」となることはありえない。

第2に、JGSS-2016の対象者年齢が満25歳～49歳（2015年末時点）であることから、本人と配偶者の最終学校については、図1のように、選択肢を新制学校に限定した。

	本人	配偶者	父親	母親
戦前	(ア) 旧制尋常小学校 (国民学校を含む)		↓	↓
	(イ) 旧制高等小学校		1 (ア)	1 (ア)
	(ウ) 旧制中学校・高等女学校		2 (イ)	2 (イ)
	(エ) 旧制実業・商業学校		3 (ウ)	3 (ウ)
	(オ) 旧制師範学校		4 (エ)	4 (エ)
	(カ) 旧制高校・旧制専門学校・高等師範学校		5 (オ)	5 (オ)
	(キ) 旧制大学・旧制大学院		6 (カ)	6 (カ)
戦後	(ク) 新制中学校	8 (ク)	8 (ク)	8 (ク)
	(ケ) 新制高校	9 (ケ)	9 (ケ)	9 (ケ)
	(コ) 新制高専 (注)	10 (コ)	10 (コ)	10 (コ)
	(サ) 新制短大	11 (サ)	11 (サ)	11 (サ)
	(シ) 新制大学	12 (シ)	12 (シ)	12 (シ)
	(ス) 新制大学院	13 (ス)	13 (ス)	13 (ス)
	わからない	14	14	14
	結婚したことはない・離別した	※	15	※

図1 JGSS-2016 最終学歴の選択肢 (面接票 問57)

注：(コ) と答えた人には、高専と専門学校・専修学校とを混同していないか尋ねる。

### 3. 高等専門学校 (高専) の回答に関する問題

#### 3.1 高専の回答に関する問題とデータ修正

高等専門学校 (高専) は、2014年4月1日時点で、全国に57校しかなく、そのほとんどは国立である (国立51校、公立3校、私立3校)。中学校卒業程度を入学資格として、主に工学・技術系の専門教育を行う5年制 (商船のみ5年半) の学校であるため、学歴を尋ねる設問では、高校・短大・大学と区別した独立した選択肢を設けている。しかしながら、下記に述べるように、専門・専修学校と誤解されるなどして、最終学校を高専 (高等専門学校) と回答する割合が、実際よりも膨らんでいる調査が少なくない。JGSSの面接調査においても、最後に通っていた学校を高専と回答していたケースの中には、実際には高専ではないと思われるケースが少なくない。表1~4のクリーニング前とクリーニング後の高専の回答数をみると、本人が49→13、配偶者が50→12、父親が33→7、母親27→1と、修正されたケースはかなりの数に上がる。

本人の場合、高専と回答された計49ケースのうち、専門・専修学校 (問59-1~4) や高校の学科 (問60-1,2) などの回答から判断して、①専門・専修学校と混同して高専と回答したと推察されるケースが20ケース、②調査員のマークミスによって高専になったと推察されるケースが16ケースあった。

①については、JGSS-2015では、JGSS-2012までとは異なり、問59で専門・専修学校で学んだ学科もしくは分野、ならびに学んだ時期を尋ねた。10(コ) 新制高専に○があるものの、問59~61の内容から総合的に判断して、「9(ケ) 新制高校のあと、専門学校に通ったと推察される」ケースがほとんどである。高専は、JGSSの特別調査であるライフ (LCS) を除き、これまでのJGSSの本調査では確認する情報がなかった。そのため、これまでの調査では、高専の割合が実際よりも膨らんでいる可能性がある。

②に関しては、主に、問59と問60の回答から、高専にも専門学校にも通わず、高等学校に通ったと推測されるにもかかわらず、「高専」と回答したケースである。「新制高校」と「新制高専」はJGSSの最終学歴の選択肢では上下に連続して記載されていて、調査員が見誤って「高専」にマークをしてしまったケースと考えられる。

配偶者については、高専から高専以外のカテゴリに修正された38ケースのうち、21ケースは専門・専修学校に通ったことがあるケースである。父親、母親については、専門・専修学校の情報はなく、職業や年齢などでほんとうに高専に通ったかどうか推測することが可能である。父親・母親とも、または本人・配偶者とも高専と回答したケースもあるが、その多くはマークミスによる間違い回答と考えられる。

### 3.2 高専の回答に関する問題と学歴分布

表5は、クリーニング前とクリーニング後の回答者本人の学歴の分布を比較したものである。分布の割合が比較的大きく変わったのは、新制高専(2.4%→0.6%)と新制高校(47.4%→49.1%)である。これは、新制高専の回答の多くが新制高校に修正されたためである。こうした修正によって、「真の学歴分布」との乖離が幾分縮まったと考えられる。これを確かめるべく、以下では、JGSS-2015のクリーニング前・後の学歴分布と、公的統計調査の学歴分布を比較してみる。

表5 JGSS-2015 学歴分布【本人】

	戦前							戦後						14 わからない	99 無回答	N
	1 旧制尋常小学校	2 旧制高等小学校	3 旧制中学校・高等女学校	4 旧制実業・商業学校	5 旧制師範学校	6 旧制高校・旧制専門学校・高等師範学校	7 旧制大学・旧制大学院	8 新制中学校	9 新制高校	10 新制高専	11 新制短大	12 新制大学	13 新制大学院			
クリーニング前(%)	0.6	0.7	2.5	0.3	0.0	0.3	0.2	10.0	<b>47.4</b>	<b>2.4</b>	9.5	24.0	1.9	0.0	0.2	2079
クリーニング後(%)	0.6	0.7	2.3	0.3	0.0	0.0	0.0	10.6	<b>49.1</b>	<b>0.6</b>	9.4	24.2	1.9	0.0	0.1	2079
差(クリーニング後-クリーニング前)	0.0	0.0	-0.2	0.0	0.0	-0.2	-0.1	0.6	<b>1.7</b>	<b>-1.7</b>	-0.1	0.3	0.0	0.0	-0.1	-

比較に用いる調査は、「平成26年国民生活基礎調査」であるが、参考として「平成24年国民生活基礎調査」と「平成24年就業構造基本調査」の結果も提示する。「国勢調査」を利用しない理由は、第1に、利用可能な最新のデータは2010年版に限られているためである。第2に、「国勢調査」の学歴の選択肢は、「小学・中学」、「高校・旧制中」、「短大・高専」、「大学・大学院」の4つであり、専門学校は、入学資格と修業年限により、この4つのいずれにも相当するため、JGSS調査との比較(とくに「短大・高専」についての比較)が難しいからである。一方、「国民生活基礎調査」と「就業構造基本調査」は、「小学・中学」「高校・旧制中」「専門学校」「短大・高専」「大学」「大学院」の6区分で尋ねている。専門学校を最終学校として尋ねているため、高専を専門学校と勘違いして回答するケースはほとんどないといえよう。

JGSS-2015の学歴データについては、比較のために、対象者本人の最終学校のカテゴリを「国民生活基礎調査」の学歴区分に合わせて再割り当てしてから集計した。「専門・専修」については、最終学校の回答が高校あるいは高校までで、その後に専門・専修学校に通っていたケース、そして短大・高専、大学を中退、かつ専門・専修学校に通ったケースについて、最終学歴を「専門・専修」とみなしている(図3の注を参照)。参考として重み付けをした結果も併せて提示した(JGSSの重み付けに関しては大阪商業大学JGSS研究センター編, 2013, pp.31-35を参照)。

図3は、各調査における学歴分布を示している。まず、JGSS-2015のクリーニング前の分布とクリーニング後の分布を比較してみると、比較的ずれが大きいのは「専門・専修」と「短大・高専」である。「専門・専修」に1ポイントほどの差が生じたのは、クリーニングを通じて(高専+専門・専修)から(高校+専門・専修)に修正された21ケースが、クリーニング前には「専門・専修」ではなく、「高専」に数えられたためである。

「国民生活基礎調査」と「就業構造基本調査」の結果と比べると、JGSS-2015の分布のほうが、学歴がやや高くなっている。JGSSで「専門・専修」の割合が高いのは、JGSSでは、「専門・専修」に専門・専修学校の中退・在学者も含まれていることがいくらか影響していると考えられる。ここで注目されるのは、「短大・高専」の割合である。クリーニング前の「短大・高専」の割合と、「平成26年国民生活基礎調査」の「短大・高専」の割合(8.8%)との間では3.2ポイントのずれがあったが、クリーニング後には1.5ポイントに改善している。

全体として、クリーニング前の分布よりもクリーニング後の分布の方が、「平成26年国民生活基礎調査」の分布に適合しているように見受けられる。これを確認するため、国民生活基礎調査の学歴分布が母集団における分布であると見なし、クリーニング前の分布およびクリーニング後の分布について $\chi^2$ 適合度検定

を行い、両者の結果を比較する。検定統計量を計算すると、クリーニング前 (n=1944) が  $\chi^2=71.3$ 、クリーニング後 (n=1946) が  $\chi^2=60.9$  という結果が得られた (計算方法は、岩井・保田 2007、pp.163-167 を参照)。有意水準 5% で検討すると、自由度  $7-1=6$  の  $\chi^2$  分布における臨界値は 12.6 なので、71.3 および 60.9 という  $\chi^2$  値は、期待と同じ分布であるという帰無仮説の採択域を超えている。つまり、どちらも適合していない結果と判定される。しかしながら、採択域に近ければ近いほど、適合度が高いと見なすことができるので、クリーニング前と比べてクリーニング後の分布の方がより適合していると言える。

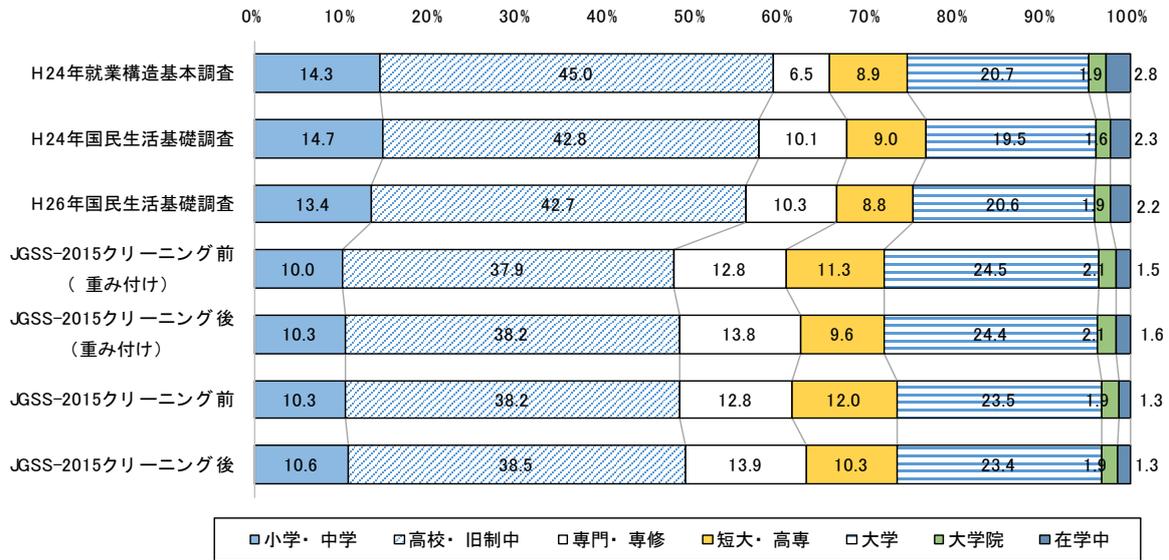


図3 学歴分布の比較 (いずれも 20~79 歳)

注： 比較のために、JGSS-2015 の学歴データについては、対象者本人の最終学校のカテゴリを「国民生活基礎調査」の学歴区分に合わせて再割り当てしてから集計した。ただし、①最終学校を中退している場合は、それより低い学歴に修正した。具体的には、高校・旧制中→小学・中学、短大・高専→高校・旧制中、大学→高校・旧制中、大学院→大学である。②「専門・専修」については、最終学校の回答が高校あるいは高校まででその後に専門・専修学校に通っていたケース、そして短大・高専、大学を中退、かつ専門・専修学校の通学歴があるケースについて、最終学歴を「専門・専修」とみなした。なお、JGSS では、専門・専修学校を卒業/修了したか尋ねていないので、「専門・専修」には、専門・専修学校の中退・在学者も含まれている。

また、上記の「適合していない」という検定結果は必ずしも正しいとは言えない。大規模サンプルに対して検定を行う場合は、わずかな傾向でも有意になりやすい、言い換えれば、簡単に帰無仮説を廃棄してしまうという問題が生じる。この問題の解決策として、 $\chi^2$  適合度検定の代わりに、一般化  $\chi^2$  適合度検定がしばしば用いられる。この方法は、逸脱の程度を自由に設定できる点で一般性が高いが、帰無仮説の逸脱量をどう定めるかが問題になる。何らかの納得できる基準を確立することができなければ、恣意性を逃れることができない (保田 2004)。恣意的な基準ではあるが、学歴の各カテゴリにおいてそれぞれ 1.5 パーセントポイントぐらいの差はあっておかしくない (その差が持つ意味はない) と仮定し、この基準で一般化  $\chi^2$  適合度検定を行うと、帰無仮説が採択され、JGSS-2015 の分布は国民生活基礎調査の分布に適合しているという結果が得られるのである<sup>(5)</sup>。

### 3.3 調査票の設計問題と J16 における改善点

面接票の間 57 には、調査員への指示として、「新制高専と答えた人には、高専と専修学校・専門学校とを混同していないか尋ねる」、専修学校・専門学校に通ったと回答した場合は、「その学校に入る前にいた学校について尋ねる」と記載している (図 4 の網掛けの部分)。また、回答票の「新制高専」の選択肢については、詳細な説明が記載されている (図 6 の網掛けの部分)。これは、高専と (高卒+専門学校) とを区別するのに役立つと考えられる。

しかし、実際には、調査員は網掛けの部分の説明していないケースが多いようである。例えば、調査票の最後に調査員が記載しているコメント欄をみると、「回答者が先々答えるので、後から追っかけたり、詳しく尋ねるのに苦労した」というものもあり、回答者が回答票を見ないケースや、調査員を急がせたりするケースがあるように推察される。最終学校を回答しない対象者は非常に少ないが（JGSS-2015 では無回答は 0.1%）、調査員が聞き直すことはためらわれる設問であろう。一方、中央調査社に確認したところ、調査員も高齢化していて、暗いところで小さな網掛けの文字は読みにくいという指摘があったという。

そこで、JGSS-2016 では、図 5 と図 7 のように、調査票と回答票の網掛けを外し、フォントを明朝からゴシックに変えた。また、回答票の「新制高専」の説明をより簡潔に修正した。

問 57 [回答票 47] あなたが最後に通った（または現在通っている）学校は次のどれにあたりますか。あなたの配偶者やご両親についてもわかる範囲でお答えください。なお、中退も卒業と同じ扱いでお答えください。

配偶者については死別の場合にも尋ねる。  
最後に通った学校が専門学校という場合には、以下のようにする。  
高等専門学校（工業分野を中心として、中学卒業後に入る 5 年一貫の高等教育機関）→10（コ）に○をする。  
戦後の専修学校の一般課程・高等課程・専門課程（一般に専門学校と呼ばれるもの）→その学校に入る前にいた学校について尋ねる。  
戦前の専門学校→6（カ）に○をする。  
〔注〕（コ）と答えた人には、高専と専修学校・専門学校とを混同していないか尋ねる。〕

図 4 JGSS-2015 問 57（最終学校）のレイアウト

問 57 [回答票 47] あなたが最後に通った（または現在通っている）学校は次のどれにあたりますか。あなたの配偶者やご両親についてもわかる範囲でお答えください。なお、中退も卒業と同じ扱いでお答えください。

【配偶者については死別の場合にも尋ねる。  
最後に通った学校が「専門学校」という場合には、以下のようにする。  
●一般に「専門学校」と呼ばれる学校（戦後の専修学校の一般課程・高等課程・専門課程）→その学校以外で最後に通った学校について尋ねる。  
●高等専門学校（工業分野を中心として、中学卒業後に入る 5 年一貫の高等教育機関。主に国公立）→10（コ）に○をする。  
●戦前の専門学校→6（カ）に○をする。  
〔注〕（コ）と答えた人には、高専と専修学校・専門学校とを混同していないか尋ねる。】

図 5 JGSS-2016 問 57（最終学校）のレイアウト

〔回答票 47〕

戦前

- (ア) 旧制尋常小学校（国民学校を含む）
- (イ) 旧制高等小学校
- (ウ) 旧制中学校・高等女学校
- (エ) 旧制実業・商業学校
- (オ) 旧制師範学校
- (カ) 旧制高校・旧制専門学校・高等師範学校
- (キ) 旧制大学・旧制大学院

---

戦後

- (ク) 新制中学校
- (ケ) 新制高校
- (コ) 新制高専\*  
\*高専（高等専門学校）は、工業分野を中心として、中学卒業後に入る 5 年一貫の高等教育機関。専修学校・専門学校とは異なる。
- (サ) 新制短大
- (シ) 新制大学
- (ス) 新制大学院

図 6 JGSS-2015 回答票 47

〔回答票 47〕

戦前

- (ア) 旧制尋常小学校（国民学校を含む）
- (イ) 旧制高等小学校
- (ウ) 旧制中学校・高等女学校
- (エ) 旧制実業・商業学校
- (オ) 旧制師範学校
- (カ) 旧制高校・旧制専門学校・高等師範学校
- (キ) 旧制大学・旧制大学院

---

戦後

- (ク) 新制中学校
- (ケ) 新制高校
- (コ) 新制高専\*  
\*新制高専は、工業関係の 5 年制の学校で、主に国公立です。
- (サ) 新制短大
- (シ) 新制大学
- (ス) 新制大学院

☆ 専門学校・専修学校→専門・専修学校以外で最後に通った学校は、(ク)～(ス)のどれにあたりますか。

図 7 JGSS-2016 回答票 47

## 4. 高校の学科および最終学校で学んだ学部・学科の回答に関する問題

### 4.1 修正が必要なケース

学んだ学部・学科に関する回答については、主に2つの問題があった。いずれも最後の学校が高専、短大、大学、大学院の場合の学部・学科(問61-2)の回答と高校の学科(問60-1)の回答が同じになってしまっているケースである。

1つは、高校の学科(問60-1のその他の自由記述)を大学や短大の学科で回答したケースである(計8ケース)。具体的には、文学部(2ケース)、英文科(2ケース)、社会学(1ケース)、理数科(1ケース)、法科(1ケース)、簿記(1ケース)と回答している。

もう1つは、最後の学校の学部・学科を「普通科」と回答したケースである(計11ケース)。最終学校が短大の6ケースについては、短大の「教養科」のことを普通科で回答している可能性がある。残り5ケースは、最終学校が大学で「普通科」と記載されているケースで、高校を念頭において回答している可能性が高いと思われる。

その他、問61-1(最終学校の種類)、問61-2(最終学校の学部・学科)を高校で回答して、後に修正されたケースが数多く見られた。中には、調査員自身が修正または消去しているケースもあれば、点検者が×で訂正したケースもある。

### 4.2 調査票の設計問題とJ16における改善点

こうした回答の間違いが多く生じた理由として、調査票のレイアウトによって、以下のような、調査員の誘導による間違いが起きやすくなったと考えられる。

第1に、問61-1における調査員への指示「問57の「本人」の回答→\_\_\_\_\_」についてであるが、調査票のレイアウトが影響して、図8に示すように、「問57の本人の回答」を、問60-1の回答と混同する間違いを誘発していると考えられる。新制大学卒で、本来は、問60-1/60-2は高校について、問61-1/61-2は大学について答えるべきところを、問60と問61のいずれにおいても高校について回答しているケースが、少なからず発生しているのは、そのためだと推測される。

(問57で本人が(ケ)新制高校、(コ)新制高専、(サ)新制短大、(シ)新制大学、(ス)新制大学院と答えた人に)

問60-1【回答票50】あなたが通った高校で学んだ学科は何でしたか。2つ以上の場合は主な学科を1つお答えください。

1 (ア) 普通科	4 (エ) 農業に関する学科	7 (キ) 高校には行っていない
2 (イ) 工業に関する学科	5 (オ) 家庭・家政に関する学科	8 わからない
3 (ウ) 商業に関する学科	6 (カ) その他の学科(具体的に)	

問60-2【回答票51】その高校では、どのくらいの割合の人が大学・短大に進学しましたか。

1 (ア) ほとんど全員	4 (エ) 2~3割程度
2 (イ) 7~8割程度	5 (オ) ほとんどいない
3 (ウ) 半数くらい	6 わからない

(問57で本人が(ケ)新制高校と答えた場合は、問62へ)

(問57で本人が(コ)新制高専、(サ)新制短大、(シ)新制大学、(ス)新制大学院と答えた人に)

問61-1【回答票52】あなたが通った(または現在通っている)問57の「本人」の回答は、国立でしたか、公立でしたか、あるいは私立(わたくしりつ)でしたか。

1 (ア) 国立	2 (イ) 公立	3 (ウ) 私立	4 わからない
----------	----------	----------	---------

問61-2 その学校でのあなたの学部・学科を教えてください。  
学部・学科名を具体的に記入する。

(具体的に)

図8 JGSS-2015 学歴に関する問60-1~問61-2

第2に、問61-1で上記のように「問57の「本人」の回答→\_\_\_\_\_」の部分で設けたのは、問57の最終学校を記入することで、問61を高校で回答するような間違いを防ぐためであった。ところが、記入するよう明記していなかったためか、ほとんどの調査員は、\_\_\_\_\_の部分に、問57の「本人」の回答を書き込んでいなかった。

第3に、問60-1の「7(キ) 高校に行っていない」から問61への矢印が、問60の枠線から出ているようにも見えることが、誘導の間違いを引き起こしたと考えられる。

[回答票 53]

(専門学校・専修学校以外で)最後に通った学校が	(専門学校・専修学校以外で)最後に通った学校が	(専門学校・専修学校以外で)最後に通った学校が	(専門学校・専修学校以外で)最後に通った学校が
〈新制〉高専の方	〈新制〉短大の方	〈新制〉大学の方	〈新制〉大学院の方
101 機械工学科	201 英文(学)科	301 文学部	401 文学研究科
102 電気工学科	202 国文(学)科	302 外国語学部	402 外国語学研究科
103 電子制御工学科	203 経済(学)科	303 人文学部	403 人文科学研究科
104 情報工学科	204 商業(学)科	304 法学部	404 法学研究科
105 物質工学科	205 看護(学)科	305 政経学部	405 政治学研究科
106 建築学科	206 社会福祉(学)科	306 経済学部	406 法科大学院
107 環境都市工学科	207 家政(学)科	307 商学部	407 経済学研究科
108 商船学科	208 生活科学(学)科	308 経営学部	408 商学研究科
777 その他	209 食物栄養(学)科	309 社会学部	409 経営学研究科
〈具体的に )	210 服飾(学)科	310 工学部	410 社会学研究科
	211 保育(学)科・幼児教育(学)科	311 理工学部	411 工学研究科
	212 音楽(学)科	312 理学部	412 理工学研究科
	213 デザイン(学)科	313 農学部	413 理学研究科
	777 その他	314 薬学部	414 農学研究科
	〈具体的に )	315 医学部	415 薬学研究科
		316 看護学部	416 医学研究科
		317 社会福祉学部	417 看護学研究科
		318 家政学部	418 社会福祉学研究科
		319 生活科学部	419 教育学研究科
		320 児童学部	420 芸術学研究科
		321 教育学部	421 音楽研究科
		322 芸術学部	777 その他
		323 音楽学部	〈具体的に )
		777 その他	
		〈具体的に )	

図9 JGSS-2016 最終学校で学んだ学部・学科の選択肢

そこで、JGSS-2016では、学歴部分の設問順序を変えるなど調査票のレイアウトを変更した。第1に、JGSS-2015では、専門・専修学校(問59-1~4)→高校(問60-1,2)→最終学校(問61-1,2)の順であるが、JGSS-2016では、高校(問59-1,2)→専門・専修学校(問60-1~4)→最終学校(問61-1,2)という順序に変えた。対象者全員に尋ねる専門・専修学校を間に配置することで、高校についての設問が最終学校についての回答に影響を及ぼすことが改善されると考えられる。

第2に、インストラクションの\_\_\_\_\_の部分の下に【↑清書して提出】と明記した。

第3に、最終学科で学んだ学部・学科の質問形式を、自由回答方式から選択肢方式に変更した。高専・短大・大学・大学院別に選択肢をリストした回答票を提示し(図9)、回答番号を調査票に記入することになっていて、調査票には選択肢が掲載されていない。JGSS-2015とJGSS-2016の調査票の学歴関連のページは、附図1、附図2を参照されたい。

## 5. まとめ

本稿では、JGSS-2015の実施を通して、学歴に関する回答に誤記入が多いことを確認した。学歴は、調査員が聞き直しにくい事柄であり、調査員にとっても、対象者にとっても、設問の流れが理解しやすく、間違いなく迷うことなく選択できることが、他の設問以上に強く求められる。JGSSの原型であるアメリカのGeneral Social Surveyでは、面接調査の際に、調査員がPCを持参して回答を入力している。ただし、回答者の言葉を漏らさないように、了承が得られた場合は会話を録音して、データ・クリーニングに役立っているという。JGSSでは、学歴は面接調査で尋ねており、対象者が回答の際に迷った場合や調査員に語った説明は、調査員により面接調査票に書き留められている。JGSS研究センターでは、入力されたコードとともに、調査票に書き込まれたこれらの情報を参照して、クリーニングを行った。

年齢で判断して、新制学校と考えられるが旧制学校で回答したケースもあれば、旧制学校と考えられる新制学

校で回答したケースもあるが、前者のほうが後者より多い。高専を専門学校と勘違いするケースは、JGSS を 2000 年に開始したときから、何度となく議論になり、これまでも改善を図ってきたが、根本的な解決には至っていなかった。JGSS-2015 では、「専門・専修学校」への通学が相当数に上っている現状を踏まえて、専門・専修学校に通った時期や学んだ内容を尋ね、高校の学科や大学の学部・学科と突き合わせることによって、「高専」を「専門・専修学校」と取り違えているかどうかをかなりの確度で判断することができた。一方、これとは別に、調査票のレイアウトや設問順序に影響されて、最終学校で学んだ学科を高校についての設問の続きとらえて回答するケースも、少なからず確認された。

こうした問題のほとんどは、本稿で述べたように、調査票の設計を変えることで改善することができる。JGSS 研究センターでは、学歴に関する調査票の設計問題について検討を重ねて改善策を立て、JGSS-2016 の調査票に反映させた。JGSS-2016 では、実態に即した、より良質なデータが得られると期待する。本稿は、調査票の設計が調査結果に大きく影響することを改めて示している。本調査によって見出された知見が、より多くの人に活用されることを期待している。

#### [Acknowledgment]

日本版 General Social Surveys (JGSS) は、大阪商業大学 JGSS 研究センター（文部科学大臣認定日本版総合的社会調査共同研究拠点）が、東京大学社会科学研究所の協力を受けて実施している研究プロジェクトである。

JGSS-2015 は、JSPS 科研費 26245060（研究代表：岩井紀子）、大阪商業大学アミューズメント産業研究所（研究代表：谷岡一郎）、日本経済研究センター研究奨励金（岩井紀子）、労働問題に関する調査研究助成金（研究代表：岩井八郎）、JSPS 科研費 24243057（研究代表：加藤眞義）と大阪商業大学の支援を受けている。

本稿で述べた、学歴に関する調査票の設計問題と改善すべき点について、阿形健司先生（同志社大学社会学部教授）から多くの貴重なご意見を頂いた。ここに記してお礼を申し上げたい。

#### [注]

- (1) JGSS の特別調査である JGSS-2009LCS と、その追跡調査である JGSSLCS-2013 でも、学んだ学科もしくは分野などについて尋ねているが、これらの調査では中学卒業後の教育歴について詳細に尋ねているため、矛盾は生じていない。
- (2) 面接調査票の学歴に関するすべての回答を孟哲男と眞住優助が見直し、コードの見直しが必要と思われるケースについて岩井八郎と岩井紀子が確認し、宍戸邦章が修正のシタックスの最終確認を行った。
- (3) 本稿で用いる JGSS-2015 のデータは、特別利用データ (Version001) の更新版であり、確定版ではないことに留意されたい。「特別利用データ」は、JGSS 研究センターの研究課題計画書に基いて、このデータの利用を申請・採択された嘱託研究員（および調査研究奨励プログラム参加者）に配布されているもので、データの一般公開までの期限に限り利用できる。
- (4) 「社会階層と社会移動」全国調査 (SSM95・A 票)、(SSM95・B 票)、(SSM2005-J) の調査概要および調査票を参照した（掲載サイト：「SRDQ：質問紙法にもとづく社会調査データベース」<http://srdq.hus.osaka-u.ac.jp>）。
- (5) 一般化  $\chi^2$  適合度検定は、Pearson の  $\chi^2$  統計量を非心  $\chi^2$  分布に照らし合わせることで可能になる。具体的な手続きは、まず、どの程度の逸脱量なら意味のない逸脱とみなすのか、 $d_0$  の値を定める。次に、通常の  $\chi^2$  統計量を算出し、その値を非心度  $\sigma = n \cdot d_0$  の非心  $\chi^2$  分布に照らし合わせて、有意確率  $p$  を算出する（詳細については、保田 2004 を参照）。

本稿では、1.5 パーセントポイントの差という基準で逸脱量  $d_0$  を以下のように算出した。

$$d_0 = \frac{(0.015)^2}{0.134} + \frac{(0.015)^2}{0.427} + \frac{(0.015)^2}{0.103} + \frac{(0.015)^2}{0.088} + \frac{(0.015)^2}{0.206} + \frac{(0.015)^2}{0.019} + \frac{(0.015)^2}{0.022} \cong 0.02997$$

$d_0=0.02997$  と定め、クリーニング前の分布およびクリーニング後の有意度を算出すると、 $p=0.309$ 、 $p=0.563$  となった。有意水準を 5% とすると、いずれも有意ではなく、期待と同じ分布であるという帰無仮説が採択される。

[参考文献]

- 岩井紀子・保田時男, 2007, 『調査データ分析の基礎—JGSS データとオンライン集計の活用—』有斐閣.
- 保田時男, 2004, 「大規模サンプルに対する一般化  $\chi^2$  適合度検定—JGSS データへの適用例—」『日本版 General Social Surveys 研究論文集』3: 175-186.

問 59-5 (回答票 43) その専門学校・専修学校で受けた教育は、現在の仕事にどれほど役立っていますか。現在仕事をなさっていない方は、最後に収入を得ていた主な仕事についてお答えください。

1 (ア) とても役立っている (とても役立った)  
 2 (イ) ある程度役立っている (ある程度役立った)  
 3 (ウ) あまり役立っていない (あまり役立たなかった)  
 4 (エ) ほとんど役立っていない (ほとんど役立たなかった)  
 5 (オ) 働いたことがない

(67)

問 57 で本人が (ウ) 新制高校、(ク) 新制中等、(ケ) 新制短大、(コ) 新制大学、(カ) 新制大学院と答えた人に  
 問 60-1 (回答票 50) あなたが通った高校で学んだ科目は何でしたか。2つ以上の場合は主な科目を1つお答えください。

1 (ア) 普通科 4 (エ) 農業に関する科目 7 (キ) 高校には行っていない  
 2 (イ) 工業に関する科目 5 (オ) 家庭・家庭に関する科目 8 (カ) わからない  
 3 (ウ) 商業に関する科目 6 (ク) その他の科目 (具体的に )

(68)

問 60-2 (回答票 51) その高校では、どのくらいの割合の人が大学・短大に進学しましたか。

1 (ア) ほとんど全員 4 (エ) 2〜3割程度  
 2 (イ) 7〜8割程度 5 (オ) ほとんどいない  
 3 (ウ) 半数くらい 6 (ク) わからない

(69)

問 57 で本人が (ウ) 新制高校と答えた場合は、問 62へ  
 問 57 で本人が (コ) 新制中等、(ケ) 新制短大、(コ) 新制大学、(カ) 新制大学院と答えた人に  
 問 61-1 (回答票 52) あなたが通った(または現在通っている) 問57の本人の回答へは、国立でしたが、公立でしたが、あるいは私立(わたくしりつ)でしたか。

1 (ア) 国立 2 (イ) 公立 3 (ウ) 私立 4 わからない

(70)

問 61-2 その学校でのあなたの学部・学科を教えてください。

学部・学科名を具体的に記入する。

(具体例)

(全員に)  
 問 62 (回答票 53) あなたが通った(または現在通っている) 問57の本人の回答へ受けた教育は、現在の仕事にどれほど役立っていますか。現在仕事をなさっていない方は、最後に収入を得ていた主な仕事についてお答えください。

1 (ア) 2 (イ) 3 (ウ) 4 (エ) 5 (オ)  
 (ア) (イ) (ウ) (エ) (オ)  
 とても役立っている ある程度役立っている あまり役立っていないほとんど役立たなかった(働いたことがない)  
 (とても役立った) (ある程度役立った) (あまり役立たなかった) (ほとんど役立たなかった)

[66]

問 57 (回答票 47) あなたが最後に通った(または現在通っている) 学校は次のどれにあたりますか。あなたの配偶者やご両親についてもわかる範囲でお答えください。なお、中途も卒業と同じ扱いでお答えください。

配偶者については別紙の場合にも見られる。  
 最後に通った学校の別紙(問57)の欄には、以下のように入力する。  
 新制専門学校 (工業分野を中心として、卒業後5年間の高等教育機関) →10 (コ) に○をす。  
 高等専門学校 (工業分野を中心として、卒業後5年間の高等教育機関) →10 (コ) に○をす。  
 最後の専修学校の一般課程・高等課程 (一級に専門学校と呼ばれるもの) →その学校に入る前にいた学校について専修する。  
 新制の専門学校 →5 (カ) に○をす。  
 (注) (コ) と答えた人には、高等と専修学校、専門学校と区別して記入しなさい。

	本人	配偶者	父親	母親
(ア) 旧制尋常小学校 (国民学校を含む)	1 (ア)	1 (ア)	1 (ア)	1 (ア)
(イ) 旧制高等小学校	2 (イ)	2 (イ)	2 (イ)	2 (イ)
(ウ) 旧制中学校・高等女学校	3 (ウ)	3 (ウ)	3 (ウ)	3 (ウ)
(エ) 旧制工業・商業学校	4 (エ)	4 (エ)	4 (エ)	4 (エ)
(オ) 旧制専門学校	5 (オ)	5 (オ)	5 (オ)	5 (オ)
(カ) 旧制高校・旧制専門学校・高等師範学校	6 (カ)	6 (カ)	6 (カ)	6 (カ)
(キ) 旧制大学・旧制大学院	7 (キ)	7 (キ)	7 (キ)	7 (キ)
(ク) 新制中学校	8 (ク)	8 (ク)	8 (ク)	8 (ク)
(ケ) 新制高校	9 (ケ)	9 (ケ)	9 (ケ)	9 (ケ)
(コ) 新制中等 (注)	10 (コ)	10 (コ)	10 (コ)	10 (コ)
(カ) 新制短大	11 (カ)	11 (カ)	11 (カ)	11 (カ)
(コ) 新制大学	12 (コ)	12 (コ)	12 (コ)	12 (コ)
(カ) 新制大学院	13 (カ)	13 (カ)	13 (カ)	13 (カ)
わからない	14	14	14	14
結婚したことはない・離別した	※	※	※	※
	(54) (55)	(56) (57)	(58) (59)	(60) (61)

問 58 あなたは最後に通った学校を卒業しましたが、中途しましたが、それとも、現在、在学中ですか。  
 「3 在学中」の場合には、学年を記す。

1 卒業 2 中途 3 在学中 ( \_\_\_\_\_ 年生)

(62) (63)

問 59-1 あなたは専門学校・専修学校に通ったことがありますか。旧制専門学校や新制短大は含みません。

1 通ったことがある 2 通ったことがない

(64)

問 59-2 その学校であなたが学んだ科目もしくは分野を教えてください。複数の専門学校・専修学校に通った場合は、最後に通った専門学校・専修学校での科目もしくは分野を教えてください。

(具体例)

問 59-3 その学校であなたは、高等課程を修了しましたが、高等課程修了は、高等学校卒業と同等とみなされる。

1 修了した 2 修了していない

(65)

問 59-4 (回答票 48) その専門学校・専修学校に通った時期は、問57の本人の回答へより前ですか、後ですか、同時期ですか。

1 (ア) 前 2 (イ) 後 3 (ウ) 同時期

(66)

[66]

附図1 JGSS-2015 面接票 (pp. 16-17)

